

「楽しい実践」はみんなのねがい

都留文科大学 佐藤比呂二



子どものとびつきりの笑顔に「楽しいね〜」って声をかける瞬間。たまりませんよね。(あくこの瞬間の為に、この仕事している)って思う方もいるでしょう。

「楽しい」には、人の心を動かす凄じい力がありますよね。子どもにとっても大人にとっても。

こだわりにも勝る「楽しみ」

こだわりが強く、偏食もきつかった峻君(自閉症、知的障害)は、調理学習の時は調理室にさえ入ろうとしませんでした。ジャガイモを乗せたまな板と包丁を峻君のいる隣の部屋にもっていくと、1回だけポンと切って終了〜という感じでした。そんな峻君に転機が訪れました。中3のときの連絡帳に、「昨日、留守中に峻が自分で目玉焼きを作ろうとしたみたいで台所に割れた卵がありました」と書かれていたのです。(お〜自分で作ろうとしたんだ〜)と思ひ、さっそく次

の調理の時に、目の前に10個入りの卵パックを出して、「今日は目玉焼きを作ろう」と誘ってみました。大好きなトランポリンから飛び降りるようにして調理室にダッシュ。衣服へのこだわりから、どんなに寒い日も絶対に重ね着はしなかった峻君が、今まで一度も着たことがないエプロンまで着けて座っています。「楽しみ」はときに、こだわりにも勝るのですね。手際よく10個の卵を割ると、豪快にホットプレートに流し込み、とびきりの笑顔で待っています。楽しみで仕方ないとき、こんなにも輝く笑顔になるのだなど、見ている教員も自然に笑顔になっていました。笑顔は伝染しますね!

子どものねがいに応える教員集団でありたい

楽しい実践は、子どもの笑顔を引き出します。「子どもの笑顔に出会いたい」。私たちにとって、「楽しい実践」を生み出すなよりの原動力でしょう。

これは教員になりたての頃のことですが、重度の自閉症児ばかり(高等部。全員が自閉症専門の施設に入所)のクラスを受けもっていた時のことです。毎年恒例の東京都全体の球技大会に参加しました。種目はキックベース。私は担当した生徒に「あっちあっち。ボール追いかけて。走って。投げて」と声をかけ続けました。言われた通りに動くマー君は、無表情でちっとも楽しそうじゃありませんでした。もちろん、無表情の中に楽しい思いが隠れていることもあります。でも、このときは(ルールもわからず、ただ言われたまま動く。今日の一日はマー君にとって意味があったのだろうか)と自問自答しました。帰りのバスで、そのままの思いを先輩教師に伝えました。「こんななんだったら、来年は、マザー牧場でジ

ンギスカン食べ放題の方がいいですよ!」と。果たして、翌年、うちのクラスだけは、球技大会の日に、別のバスを借りてジギスカンに舌鼓をうっていました。まあそのときのみんなの笑顔つたらありません。普段、不登校気味の子も、この日ばかりは参加していました。ちよつと極端な例でしたかね…。

でも、「この方が楽しい。こうすればもっと楽しくなる」というアイデアを自由に言い合え、協力して実行に移せる教員集団に、「学校に子どもを合わせるんじゃない。子どもに

学校を合わせよう」と身をもって教えてもらいました。特別支援学校にもシラバスが求められる時代。子どもに出会う前に作った年間指導計画やシラバスなどにしぼられて、「こうあるべき」「しなければならぬ」が先に立つと、形ばかりが先行し、子どものねがいが置き去りになりはしないでしょうか。

こんな時代だからこそ、しなやかにしたたかに、そして、おおらかに、学校に子どもを合わせるのではなく、子どものねがいに応え、子どもも大人も笑顔になれる「楽しい実践」が求められています。計画はあったとしても、毎年、子どもたちの実態はちがいます。計画はあくまで計画。自由度の高い大枠の計画でいい。どんな題材でどんなアプローチをするのか、子どものねがいを受けとめて話し合っている教員集団が、「楽しい実践」を生み出します。

(踊りたいけど踊れない) 葛藤を支える

文化祭の舞台発表は、どうしても見栄えが気になりがちですが、なにより大事なものは、子どもたちの心に、「やってよかった! 楽しかった!」という思いが残せるかどうかだと思います。

泰平君(中3、自閉症、知的障害)は、中学2年のときに自閉症専門の施設に入所してきました。自分の顔を叩いたり、壁やテーブルに頭を打ち付けたりする自傷に加え、友だちを追いかけ、叩いたり蹴ったり等の他傷行為が出ることもありました。気持ちが不安定な状態が続き、楽しみのひとつ



▲目玉焼きを待つ峻君